

「はるかに越えて」

エペソ人への手紙 3 : 20 - 21

June.11.2023

### エペソ人への手紙 3 : 20 - 21 (パウロ)

#### Preface

ついに、使徒パウロの祈りが結論に至りました。

「私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに越えて行うことのできる方」という父なる神を表現しているその描写を見てみてください。

物凄い描写だと思いませんか？

ここまで使徒パウロは、この手紙の対象であるエペソ教会の人々に語り掛けるように祈ってきましたが、祈りの結論に至って突然、その対象である人々から一旦視線をそらさずにはいられないかのような感動に包まれて、一人で独白するかのように祈りを献げています。

これまで確かに使徒パウロ先生は、エペソの信徒たちという対象に向けて、「私が知っていることをあなたがたにも知って欲しいし、私が受けている恵みをあなたがたにも受けて欲しいと望んでいる。そのためには、このことについて、あのことについて、もっと明確に把握する必要があるし、把握できていないから恵みが恵みに思えていないんです」という風に語り、祈ってきたのに、突然、窓の外に目を向けたと思ったら一人目をつむりながら、感動と興奮に包まれ浸っているお師匠さんのように見えます。

つまりここまで、「人知をはるかに超えたキリストの愛を知り、その広さ、長さ、深さ、高さがどれほどであるかを理解することが出来、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように」と自分で言っておきながら、その自分で口にした内容がどれだけ豊かなもので、物凄いもので、奥深いものなのかを事新たに、感慨深げに悟らされているということです。

人知をはるかに超えることを知るようにされたこと、人知をはるかに超えたこととは、キリストの愛であるということ。

そして、その人知をはるかに超えるものが、私たちにどのように可能になったのか、その驚くべき過程と内容について祈ることが出来、その祈りに余すところないどころか、祈りをはるかに超えて既に与えられるという大きな恵みに、私たちキリスト者が入れられている事実によって改めて圧倒されています。

このパウロの独白のような祈りは、使徒パウロ自身の経験に裏打ちされた実感の伴った告白です。

## Part One

### エペソ人への手紙 3 : 7 - 9 (パウロ)

「測り知ることのできない富というキリストの愛が、私にまで、この私にまで及んだだけでなく、この神の豊かさをイスラエルの民たちではない異邦人に伝えるという誰もやったことのない大仕事を、すべての聖徒たちのうちで最も小さな者よりも小さな私に、神さまはお任せになった。最も優れて、最も賢く、最も能力のある者たちでさえも、到底やり遂げることが出来ないようなことを、最も小さな者達よりも小さく、足りなくて足りない私を用いて、神さまはやり遂げなされるとお決めになられたということ、そして、その宣べ伝えたことを信じるならば、誰でも、誰でも、その恵みに与ることが出来る」という何にも勝って喜ばしいと言いましょか、人間の願うところや思うところのすべてをはるかに超えて行われる神さまのユーモアセンスあふれる御決心にパウロは、「ただただ感動し、感謝し、ひれ伏し、賛美せずにはいられない」という結論に至ります。

私たちすべてのキリスト者の人生自体、私たちが私たちの力で生き抜き、やり遂げ、成し遂げることなんか出来ないですね。

だからこそ、とてつもないキリストの愛の広さ、長さ、深さ、高さに、その満ち溢れる豊かさにまで満たされるようにと祈るしかないんです。

もうすでに約束されていることではあるけれども、それでも祈るんです。

ややもすると、見失い、分からなくなり、忘れてしまうから祈るんです。

パウロは今、自らに及んでいる恵みに今一度、事新たに感激しています。

私が土浦めぐみ教会の主任牧師として立てられてから4年が経ち、5年目に入りましたが、その重責から逃れたくて、何度、「主よ、どうか殺してください、あの牧師先生の方が、この牧師先生の方が適任です、もう限界です、もう無理です、もうやれませんか」と、つぶやいてきたことか分かりません。

でもその度毎に、「能力もなく、持ってるものもなく、自分勝手に、体ばっか大きくて、何にもない、短気なあなたを置いてくださっておられるのは神さまなんだし、あなたがやりたいと言ってやれることでもなければ、やりたくないと言ってやらなくていいことでもなく、すべてが神様の主権で、あなたがあなたの人生の主演じゃなく、神さまの豊かさが表れるための人生なんだから。で本当のところ、あなた自身も本心はやり抜きたいと思っているでしょ？ 神さまが、『はい、そこまで』と仰るまでやるの！」と、私の一番近くにいる一人の女性が、的を突いた厳しい話を、優しい笑顔で何度も話し、諭してくれました。

こんな者をここに立てておられるのは、神さまなので、どうかご容赦ください。

パウロ先生みたいな方が、ご自分のことを最も小さな者よりも小さいと仰ったら、私などは、塵以下です。

だから正に、キリストの愛の豊かさにまで満たされる過程に入れられているとしか言えず、そこに私自身のプライド等というものの入る余地なんか1mm

もなく、私の願うところや思うところのすべてをはるかに超えて行われる神のみわざそのものだと、私自身の人生自体が神のみわざそのものだというほかありません。

今回の大雨による教会の水没も、まさにその通りです。

大変で、苦しくて、辛いことでもありますが、それ以上に、この時だからこそこの恵みを今、享受しています。

「キリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています」という御言葉が体の中で鳴り響き、反芻しています。

皆で心を合わせ、思いを一つにし、汗水流しながら、互いのことを気遣いながら、朽ちることのないキリストのからだを建て上げる神のみわざの麗しさを体験させて頂いております。

その表情や姿のすべてが、ベストショットです。

正に、「私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、教会において、またキリスト・イエスにあって、栄光が、世々限りなく、とこしえまでもありますように。アーメン」ですね。

今日の御言葉通りのことを経験させて頂いております。

## Part Two

ここで一つ、皆さんに質問致します。

私たちと神さま、どちらがより熱心だと思いますか？

なんやかんや重苦しくて、心配で、もどかしい祈禱課題があり、急を要し、いらいらし、焦っている問題がある人ほど、神さまは寝ておられ、黙っておられ、知らんぷりしていて、こちらは懸命に戸を叩いていると思いがちです。

でも違いますね。

往診に来て欲しいと病院の扉を叩いているのに、医者はまだ既に家に来ていて、注射を打って、治療はもうすでに終わっています。

一人で、病院の扉を開けてくれないと取っ手にしがみ付いて騒いでいます。家に帰ってみてください。

イエス様はとっくに来ておられて、奥の部屋でお待ちになっています。あまりにも家主が帰ってこないの、首を長くして待つておられます。

神さまと私たち、どちらがより熱心でしょうか？

それでも、私たちの方が熱心でしょうか？

使徒パウロの祈りに表れるその感激が、お分かりになるでしょうか？

「そうか！ 神さまが私たちのためにイエス・キリストをお送りになり、私たちのために聖霊をお送りくださり、私たちのうちに住まわせてくださり、私たち

が何をどう祈ればいいのかもわからずに、ただただそのもどかしさをぶつけるようなつぶやきの中にあつてさえも、神さまと、神さまの約束と、神さまの聖さと義を思い出させてくださり、私たちを相手にどんな手を使ってでも、何とでも私たちが以てして、栄光と義の栄冠をかぶるその座にまで導き上げるために、私たちが揺すぶっておられるのだな！」と、悟るのです。

これを悟ったパウロは今、牢獄にいます。牢獄に繋がれた囚人です。

私たちの歩みを振り返ってみますと、神さまが、どれだけ私たちが揺すぶり、介入され、思い出させ、要求して来られたことか、一度や二度ではないでしょう。

神さまは、私たちの訴えに顔を背けなされたこともなく、無視したためしありません。

私たちの訴えに対する応答の見た目が、外見が違うことは多々ありますが、その内実・内容は、いつも私たちの訴えよりもはるかに勝ったものであるはずです。

もしかしたら、勝っていることが、まだ今は分からないかもしれませんが、過去の経験、事例、聖書の記述からしますと、必ずや神さまのお与えくださるものは、私たちの思いや願いよりも勝っています。

神さまは、私たちのうちにもうすでにお働きになっておられます。

私たちが先に従って行ったのではなく、神さまが先に来られて、すでに私たちが揺すぶっておられ、今日の聖書の御言葉に直面するようになさり、御言葉の約束を私たちに今一度お与えくださり、チャレンジしておられます。

だのに、私たちは、神さまのそのチャレンジをまともに感知することも、悟ることも出来ないのです、精いっぱい祈りだというのが、「神さま、腰痛がたまらないので、この腰痛さえ良くしてくださったら、もう他の願いはありませんから」、「神さま、どうかうちの子を良い学校へと導いて下さり、良い職場へと導いてくださり、良い人と出会い結婚出来れば、もうそれ以上の願いはございませんから」、「あの目障りな人だけを何とかしてくださったら、もう他には何もありませんから」、「神さま、いや普通でいいんです。並みでいいんです。人並みに生活さえ出来れば、もうそれ以上のことは望みませんから、どうかお願いいたします」、「神さま、あの新しい機種さえ手に入れば、もうそれだけでハッピーです」等々ではないでしょうか。

すると神さまは、「子よ、それだけでいいのか？ それだけで、あと残りは何をしようとしているんだい？」と、神さまが私たちにもどかしさを覚えておられるということです。

その神様の心の内を描写している祈りの言葉が、「私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできるお方」という言葉です。

神さまは、私たちの考える最高よりも、はるかに勝るお方です。

たかだか、家内安全、五穀豊穰、無病息災、子孫繁栄、商売繁盛、安寧長寿、程度の願いをもって、神さまを貧しく貶めてしまうのは辞めましょう。

私たちの貧しさに従って、神さまを貧しくしてしまうのは、我慢ならないことですよね。

神さまは、その程度で満足されるお方ではありません。

「どうか、このコロナ禍のきれっぴしみたいな状態を、水害からの復旧を何とかしてくださったら、何と素晴らしいことでしょう」という要求程度のお方ではなく、すべてをはるかに超えて行うことのできるお方です。

結局、私たち自身に問いたださなければならないのは、「私は果たして、どれほどに神様のことを知っているのだろうか？」ということです。

### Part Three

皆さんは、神さまをどういうお方だと思っておられますか？

神さまについて、どれくらいご存知ですか？

神さまとは誰でしょうか？ どなたでしょうか？

私たちすべてが、結局のところ、この質問に直面するのです。

では、私たちが知っている神さまとはどういうお方でしょうか？

多くの方々の知っている思っている神とは、比較的、平穩無事に生活している時にはジッとしておられ、一人ではどうすることも出来なくなってしまったピンチの時に呼ぶと、特急列車に飛び乗ってやって来る実家のお母さんのような存在ではないでしょうか。

でも、これは違いますね。神さまはそういうお方ではありません。

私たちが、神さまをそのような形で私たちの人生から追い出し、神さまの御力を私たち自ら制限してしまいました。

助けを求めたとしても、先ず自分で既にやってみて、「あと1段届かないから、神さまが来てくださって、足元にブロック一つ入れて下さればそれでOKです」というように、神さまを私事に動員させるかのようにしているから、キリストを、神を信じているという信徒の生活が貧しいのではないのでしょうか。

私たちの祈りの大部分は、申し訳ありません。

失礼かもしれませんが、くだらないと言いましょうか、取るに足りない、無用で余計な内容に満ちているように思います。

「神の満ちあふれる豊かさ」と比較しますと、実に下世話な要求ばかりです。

それをあたかも、命が掛かっている唯一のことであるかのように祈ります。

「神さま、他のことはいいません。これだけ！これだけ叶えてくださったら、もう他にはいいません。」

何でこんな祈りばかりが出て来てしまうんでしょう...

神さまが私たちに約束して下さったことが、どれだけもの凄いなのかを良く分かっていないから、それを放棄しているかのような言葉を、祈りを口走ってしまうわけですね。

歴史の中で、信仰ゆえに殉教したキリスト者が沢山いますが、なぜ殉教が可能だったのでしょうか？ 可能なのでしょうか？

私が両目をえぐり出されても、私が十字架刑に掛けられることがあったとしても、私が火の燃え盛る炉に投げ込まれたとしても、それらは、神さまが私たちに約束し、与えようとしておられるものとは比較にならないからですね。

だから、喜んで死を選択していくのです。

私たちは今、手の指一本、足の指一本のために、神さまがすべて約束して下さっているものを放棄するような貧しいところへと、入っているのかもしれない。

ここ最近、アメリカの教会や牧師たちの中で、「果たして、私たちが追求してきた教会成長とは、神さまが望み、聖書が語っているものだったのだろうか？

まともに神様のことを、聖書のことを語ってきたのだろうか？

耳に心地の言い話ばかりをしてきたのではないだろうか？

世の中の資本主義・物質主義的価値観に染まった信仰しか示せず、持てていなかったのではないだろうか？」という懐疑心が生じています。

これはアメリカの話だけではないですね。

日本でクリスチャンやっている私たちにも、そっくりそのまま当てはまることではないでしょうか。

私たちが覚えておかなければならないことは、神様が私たちに約束して下さっているものは、私たちが到底想像することも出来ないものであるということです。

#### Part Four

聖書に記録されているすべての内容は、神さまが私たちに向かってどのような計画を持っておられ、何を約束しておられ、それがどれだけ物凄なものであるのかということです。

それなのに私たちは、私たちが今必要なものが何で、それをどのようにすれば獲得することが出来るのかというところだけに留まり続け、その場所から見えることだけを聖書の中に見ようとします。

考えてみてください。

聖書を始めから読み進めて行きますと、必ずやレビ記で引っかかります。

もちろん、難解な書物ですし、私たちには何の話だかよく分かりません。

こんなにつまらない本があるのだろうかと思ってしまうかもしれません。

どうやって全焼のいけにえを献げ、穀物のささげ物を献げ、代償のささげ物を

献げ、罪のきよめのささげ物を献げと、延々と続きますが、神さまはそれが重要だから、お書きになりました。

なのに、神さまが重要だと仰るのに、私たちは重要だと思いません。

「レビ記とエゼキエル書とヘブル書のない聖書を神様下さい」と祈る始末です。

もし、レビ記のない、エゼキエル書のない、ヘブル書のない聖書が発売されたら、もっと聖書が売られ、読まれるようになるかもしれません。

いやもっとですね。

皆さんが、私たちが好きな言葉だけを集めた聖書、集めたらどれくらいになるでしょうか？

良くて3、4ページぐらいでしょうか？

「求めなさい、そうすれば与えられます。叩きなさい、そうすれば扉がぶつ壊れて開かれるでしょう。右の頬を打たれたら、左の頬も差し出し、そして診断書を出してもらいなさい」

いいですね、分かりやすく。合理的で。

でも、そのような聖書はございません。

そんなんだから聖書がつまらなく、そんなんだから神さまが分からなくなり、自分の考えたいイメージの神を新たに作り出して、その自分のイメージの神に、自分の望みと願いをぶつけます。

聞く耳は持ちません。

「神さま、何なんですか！」と訴えたところで、神さまは、「何なんですかと言われたところで、わたしはもう既に聖書に語っているでしょ！」と、お答えになるだけです。

例えば、申命記28章などを見ますと、「わたしがあなたがたに与えた地に入り、そこで暮らしていく中で、自分たちなりの面白味や自分たちなりの趣向や自分たちの目に良いと思うことばかりで、わたしをあなたがたの人生から捨てたならば、速やかに滅びる。そしてあなたがたは、あなたがたの子どもたちを喰らうようになる」と書いてありますが、その通りになりました。

本当に神様を捨てたら、自分の子どもを喰らうようになりました。

それなのに私たちは、そういう箇所は読みたがらないですね。

読んだとしても聞き流しますし、自分とは関係のないことだと知らんぷりをして、読みたい、聞きたい、信じたい、受け入れたい、受け入れられるところだけを読みます。

すると、どういうことが起こるのか？

「天におられる父なる神さまは、ご自分に求める者たちに、与えてくださらないことがあるでしょうか。なので、願ったら与えられた。けれども、与えられたものの下敷きになってしまった」というような話、お聞きになったことはないでしょうか。

私たちいつの時からか、神さまの約束について自分勝手に解釈し、主張をして

おきながら、むしろ、神さまに大口をたたくようなことに慣れてしまっていないでしょうか。

神さまについて、私たち、あまりにも知っていません。

私たち、神さまのことを知らなければなりません。

まさしくこの点について神さまは、聖書のどこの箇所を通してでも最も重要な問題として、その読み手に、聞き手に、覚醒を促すかのように語り掛けておられます。

ホセア書6章に行ってみましょう。

## Part Five

### ホセア書6：1－3（パワポ）

神さまはお変わりになりません。

どんな嵐の夜でも、どんな闇深い夜でも、夜明けがやって来ることを妨げることが出来ないように、主は暁のように変わりなく確かに現れなされる永遠なるお方です。

『神さま、何ですか！』という言葉の口に出すこと自体が、私たちの方こそ間違っていることを表わしている」と、聖書は言います。

私たちの方こそ間違っており、私たちの方こそ分かっていません。

神さまのことを分かっておりません。

神さまは確かに、私たちに勝利と歓喜と平和を約束して下さいました。

ではなぜ、私たちの日々の暮らしに、勝利と歓喜と平和がないのでしょうか？

「なぜ、神さま、私に平和がないのですか？」と駄々をこねたところで、私たちの方が、どこか間違っているからです。

もちろん、困難と苦しみが無いとは、聖書は一言も言っていない。

同じクリスチャンでも、この上ない困難と苦しみの中にいたとしても、平和を失わない者達があります。

満足と賛美と感謝を忘れることがないキリスト者があります。

石を投げてステパノを殺そうと、血眼で躍起になっている人たちよりも、その石に打たれて死んでいったステパノの方が、はるかに平和で平安で、御使いの顔のように輝いていました。

私たちがもう既に与えられている平和を失ってしまうのは、愛を、神がどれだけ私たちのことを愛しておられるのかを知っていないからです。

愛とは、死をも超えるものです。

死は人を引き離す最大の敵ですが、愛はその死をも超えます。

シェイクスピアのロミオとジュリエットの話の中で、ジュリエットが薬を飲んで仮死状態になっていることを知らずに、ロミオは本当に死んでしまう毒薬



を飲んでジュリエットを追いかけるように死んでしまいました。

仮死状態から目を覚ましたジュリエットは、ロミオを追って死ぬと、今度は本物の毒薬を飲んで死んでしまいました。

死を勝る愛。

死が目の前にあるならば、その死さえも追いかけていくのが愛の性質です。

そんな神様の愛を、私たち、私たちの信仰生活の中で、どれほどに意識出来ているのでしょうか？

## Part Five

神の約束についても同じです。

その愛なる約束についても、私たちあまりにも知っていないのではないのでしょうか。

何か自分に不利益なことが起こったり、嫌なことが起こったり、気に入らないことが起こったり、落ち込むようなことが起こったり、思う通りに事が運ばなかったりすると、ポップコーンのように、あっちに飛び、こっちに飛びしながら、「神の愛がどこにあるんだ！」と、「神さまなんかない！」と、「私の人生置ける神の計画とは何なんだ！」と、自分の意志でどこかに跳ねて行ってしまったはずなのに、なぜだか、全部を神様のせいにして、または人のせいにして怒っています。

それでも、神さまは、あっちに飛び、こっちに飛びしている私たちのところにまで来て下さり、そのレベルにまで合わせて下さり、「わたしはあなたの弱さを知っているし、あなたに同情できる。あなたはちゃんと私の計画の中にある」と仰って下さいます。

結局、私たちの問題は何かと言いますと、天の御国よりも、この世の方が好きで、この世の中のことを愛していて、どんなに年数が経とうとも、この世との熱い恋愛感情が冷める様子はないということです。

首根っこを掴まれて教会に引っ張られてきても、または、聖霊の促しによって教会に足を運んだとしても、聖書の御言葉は上の空、眠くて仕方ありません。

しかし、山を越え、谷を越え、川を越えて行かなくちゃならなかったとしても、世の中に対する恋焦がれる思いは尽きません。

眠くなんかならないですね。

だから神さまは、ホセア書6章にあるように、私たちを引き裂き、打ち、2日間死んだままにしておくようなところを、私たちに通らせるしかないんです。

何のために？

世に抱いているその恋愛感情は、蜃気楼よりも実体のない、果かない空でしかないことを気付かせるためですね。

私たちに約束されているものは、この世の中のことでなく、神の国のことだということに改めて気付かせるためですね。

### ルカの福音書 18 : 24 - 27 (パウロ)

この話は、「金持ちは神の国に入ることが出来ないけれども、貧乏人なら神の国に入れる」というような意味ではありません。

「富を持つ者」とか、「金持ち」とは、所謂、人間社会が誇る能力のある人、優れた人、立派な人を指す言葉であって、どんなに能力があろうと、どんなに立派であろうと、どんなに長者番付1位であろうと、そんな人間のものでは不可能だというのが、神の国に入るといふ救いであり、永遠のいのちであるということです。

だからイエス様は、27節で、「人にはできないことが、神にはできるのです」と仰ったわけです。

神の国に入るといふとてつもない神の約束において、私たち人間に出来ることは何もありません。

御国を受け継ぐという神の約束は、私たち人間が足したり、引いたり、形を変えたり出来る、限りのある世の中のことでなく、世をはるかに勝って凌駕する、比較にもならない永遠に関することなので、私たちには何も出来ません。

ただただ、神の恵みですね。

じゃあ、その神の恵みである神の国は、かの日に入るところだから、今の生き方には何の関係もないのかというと、「そうではない」と言うんです。

あの残虐で、頭でっかちで、すべてのキリスト者を取っ捕まえては殺そうとしていたサウロをパウロに変え、神の国を生きるものとして下さいました。

この世にあつてこの世を生きるのではなく、この世にあつて神の国を生きる者へと変えなかり、パウロ自身も、この世にあつてこの世を生きるのではなく、この世にあつても神の国を生きようと努め、その結果、神の国の平安と平和を享受しました。

それが、エペソ教会の人々に、そして、私たちにあるようにと祈り、また祈っているうちに、自分がその恵みに入れられている事実、再び魂が震えているんです。

### Conclusion

人と人との間にある隔ての壁を打ち壊し、十字架の血潮で二つを一つにし、神に敵対して生まれながらに御怒りを受けるべき子らであった私たちが、神の子とされ、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされ、その過程において、私たちの願うところや思うところのすべてをはるかに超えて行われる方が、私たちの父であることを忘れないでいたいと思うのです。

だから、世を愛すのではなく、神を愛しましょう。

そして、このパウロの感激の独白が私たちの祈りともなるように、生きようではありませんか。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 3：20－21